

第二章 光の河

1

「大和くん^{やまと}」

肩を揺り動かされて、タケルは目が覚めた。

いつの間にか学校の図書室で、机に突っ伏したまま眠ってしまったようだ。窓から夕陽が差している。

（あれは夢だったのか…）

声をかけたのはタケルのクラスである4年1組担任の井沢先生だった。タケルは枕にしていた『生き物大辞典』を、ばつが悪そうに横に寄せた。

「すみません」

「いいのよ、睡眠学習って言葉もあるくらいだしね」そう言って井沢先生はクスツと笑った。

タケルはこの先生が大好きだ。年齢は三十歳くらいらしいが、いつも明るい色のワンピースを着て飛び回っている印象がある。休日も家でじっとしてることは少ないらしく、美術館や演奏会に出かけた話をよくしてくれる。

そんな先生がタケルの中でいっとう株を上げたのは、ものすごい読書家だったからだ。先生に言わせると「独身だからヒマなのよ」ということらしいけど。

一学期の間に先生に勧められて読んだ本は二十冊は超

えたらう。大学で児童文学を専門に勉強したという先生は、「こんな本、ありますか？」とタケルが問いかければ、いつも、おすすめの本を的確に選んでくれる。

「おー、大和くんは生物に興味が湧いたのかな？」

先生は『生き物大辞典』をパラパラとめくった。

「あ、はい、なんとなく」

それは全十数巻の大辞典の第一巻だった。地球の誕生から、生命のめばえ、人類の出現までが載っている。クーラーが程良く効いた図書室で、夏の午後の心地よさもあって眠ってしまったが、眠りに落ちる直前に見ていたのが「人類のあけぼの」というページだった。

だから、あんな夢を見たんだ。

夢の中でタケルは、猿人と呼ばれていた頃の人類になっていた。何百万年も過去の地球に生きていた人間だ。あの小猿の母親は、大辞典に載っている猿人のイラストにそっくりだった。

それにしてもリアルな夢だった。今でもあの地震の激しさを覚えてる。砂埃の混じった乾いた空気のおい、握った根っこの感触、それに小猿を抱いたときの暖かさ――。

「そろそろ閉めるわよ」

先生の言葉に、はいと返事してタケルは荷物をまとめ始めた。夢の話先生に聞いてもらいたかったけど、ま

た今度にしよう。

2

「先生、さようなら」

「さようなら、あんまり夜遅くまで本読んでちゃだめよ」

井沢先生は颯爽さつそうと自転車に乗って駅の方へと走り去った。それを見送ってタケルも自転車にまたがった。

タケルの家は駅とは反対の方角にある。山すそを切り開いて、造成してできた住宅地だ。学校から家まで上り坂が続くので、変速機のないタケルの自転車では立ち漕こぎを続けることになる。かなりしんどい。

二、三分も走ると汗が噴き出してきた。蝉時雨せみしぐれがここかしこの木立こだちからしきりに降ってくる。北で育ったタケルには関西の気候がまだなじめない。Tシャツがまるで蝉の声のようにベタベタと体にまとわりついてくる。

今日は、夏休み中にもかかわらず、図書室が開いてる日だったので、昼食後に出かけたのだ。当然授業はなかったので、一日中読書ができたタケルは大満足だった。最後の坂道を上りきって、墓場の横を抜けると桜が丘団地だ。タケルの家はその真ん中辺にある。

「やあおかえり」と庭に水をやっていた祖父じいちゃんが出

迎えてくれた。

「ただいま。あ、このにおい……」

「天ぷららしいぞ、今夜は」

「やった！」とタケルはガッツポーズを作りながら家の中へ駆け込んだ。

靴を脱ぐと、いいにおいが鼻をくすぐった。誘われるように台所の暖簾のれんをくぐった。

「あらあ、おかえりい」と祖母ばあちゃんが明るい声と笑みえで迎えてくれた。「もうすぐよお」

「ただいま！ もう空腹全開だよ」

「あらまあ、それじゃ早くご挨拶して、カバン置いていらっしやい」

「うん」

家の中は暗い。築三十年のこの家はあちこちに綻びほころが生じていて、毎年いたところが補修の必要に迫られている。

でも家を暗くしてるのはそのせいじゃないとタケルは気づいていた。母さんだ。

タケルは廊下を突き抜けて、奥の間の扉を叩いた。

「母さん、ただいま」

「——おかえり」

母さんとは、たいてい扉越しにしか話さない。食も細いからいっしょに夕餉ゆうげを囲むことも最近は少なくなった。

いつもどおり、祖父母と三人の夕食を終えたあと、居間でNHKスペシャルの世界遺産特集を2時間ほど見て過ごした。9時をまわって、祖母^{ばあ}ちゃんが声をかけてくれたので、タケルは風呂に入って汗を流した。

いつもどおりの一日だ。表面的には。そう、いつもなら入浴で火照^{ほて}った肌を夏の夜風が撫^なでるこの時間には、睡魔が襲^{おそ}ってくるはずだった。でも今日は全然眠くならない。夕方から体を支配しているワクワク感のせいだ。

タケルが二階の自室へ上がろうと階段の手すりに手をかけたときだった。音楽が聞こえてきた。かすかに聞こえるのは母さんの部屋からだ。タケルは階段をかけた足を降ろし、母さんの部屋に向かった。

「母さん、起きてる？」タケルは扉に声をかけた。

「——ええ」

声が返ってきた。タケルは静かにノブを回し、扉を手前に開けた。部屋の中から光が差した。母さんの姿を照らし出していたのは、燭台^{しよくだい}の上の三本のろうそくだ。

母さんはベッドに静かに腰掛けていた。この部屋から出ることが少なくなつて数ヶ月。顔色は白くなり、体つきもすっかり細くなつたけど、痩せこけた印象はなかつ

た。ただ存在感が薄い。タケルには母さんまでの距離が果てしなく遠く感じられた。

「母さん、具合はどう？」

「——いいわよ」

「今日は、えっと、暑かったけど学校へ行ったよ」

「——そう」

流れているのはピアノの静かな曲だ。母さんが目覚めているときは、いつもこの曲が小机にセットしてあるCDプレーヤーから流れている。

「ぼく、もう寝るね」

「そう——おやすみなさい」

「おやすみなさい」

そう応えてタケルは部屋を出て、静かに扉を閉めた。

そしてふうーっと息を吐いた。

祖父ちゃんには、もっと頻繁に声をかけてあげなさいと言われるけれど、無理だ。母さんを前にすると、つい肩に力が入るし、顔が強^{こわ}ばってしまう。どこか別世界に住んでいるような、あんな母さんを見るのはつらい。ぼくだって泣きたいときはあるんだ。でも母さんの前でそんな顔は見せられない。

階段を上る途中で、ピアノ曲が消えた。母さんはぼくの顔を見たかったのかもしれない…。

ベッドに横になったものの、眠れそうになかった。今日学校で見た夢を誰かに話したくてしょうがない。荒唐無稽な夢物語だけに、誰にでも話せることじゃない。祖父ちゃんたちでは駄目だ。何人か友人の顔が浮かんだが、笑われるに決まってる。井沢先生なら親身に聞いてくれるだろうけど、どうにも照れくさい。——となれば、残るはひとりしかない。いや、こんな時まさに打ってつけの人物がいる。

にいで
新出博士だ。

タケルは即、携帯電話でメールを打った。

“こんばんはタケルです。今晚電話してもいいですか？”

返事は1分で来た。

“いますぐOK”

タケルは間髪置かずに電話をかけた。コールが一回鳴っただけで相手が出た。

「よおーい、タケル、ウェルカム！」

「こんばんは、博士、遅くにごめんなさい」

「外交儀礼などいらん！ 元気にしとるか？」

「はい、なんとか」

「“なんとか”か。不景気だな」

新出博士は山形の米沢に住んでいる。タケルが母さんと春まで住んでいた町だ。

五十歳を越えた博士は独りで暮らしていた。博士は誰とも話さない、交わらない、要するに偏屈者^{へんくつもの}だった。自宅を研究所と称して、ときどき屋内から奇声を響かせては、周囲を驚倒せしめていた。そんな博士は、町の人たちにとって腫^はれ物のような存在だったのだ。

なのに、どうしてタケルは博士と知り合うことになったのか？

その頃、タケルは孤独だった。そして毎日が退屈だった。だから誰とも没交渉な博士の暮らしぶりに興味を持った。変人の姿を覗^{のぞ}き見てやろうと考えたのが、そもそものきっかけだった。

タケルは裸眼で両眼とも二・〇は余裕だ。裏の高い堀の上によじ登り、その眼で研究所の中を覗きこんだ。したら、世にも恐ろしい怪物と正面からにらめっこするハメになってしまった。腰が抜けたタケルを捕まえたのは、怪物の着ぐるみを着た人間、博士だった。

タケルが捕まってからもおとなしくしていたのは、博士が悪そうな人に見えなかったからだ。そう言ったら、「タケルは眼がいいからな」と不思議なことを言った。そしてこうも言った。

「君はその良い眼で、見たいことも、見たくないことも、

いっぱい見てきたようだな」

5

それ以来、タケルは新出博士^{にいで}の研究室に入り浸るようになった。博士は世間で噂されるような偏屈ではなかった。多少、いやかなり変わってはいたが、タケルとは非常に馬が合った。

遊びに行くと博士はいつもタケルを笑顔で迎えてくれた。そして訪問を重ねるに連れ、居座る時間がだんだん長くなっていった。ときには研究の邪魔にならないだろうかと思うこともあったが、博士はそんな素振りをまったく見せなかった。

意外にも博士は話し好きで、話し上手だった。研究分野である生物に関する話を、タケルにわかるような易しい言葉で解説してくれた。昔は大学で教えたこともあるという。博士のような先生がいる大学なら行ってもいいなと思った。

研究所にはさまざまな動物標本があつたが、檻^{おり}に飼っている本物の動物もいた。時に町の人が耳にする奇声の正体はこれだったのだ。元々は霊長類といわれる猿の研究がメインだったが、いまは鳥類にも興味があるという。タケルが最初に忍び込んだとき、博士はまさに“鳥”に

なっていた。

「鳥の気持ちは鳥にならんとわからん」

そんなことを自慢の髭ひげをなでながら真顔で言う博士が、タケルはますます好きになった。

博士は若い頃、世界中を旅して回ったという。旅をしながら、自分には何ができるのだろう、何をしたいのだろう、そう問い続けたそうだ。

「“自分探し”ですね」とタケルは訊いた。

「違うぞ。探す必要などない。自分はいつもここにいます。自分探し”などという言葉が流行はやるから、自分を見失う人間が増えるのだ。わしはな、世界中でいろんなことを体験して、何をしたときに感動したり楽しくなったりするようにできているのか、自分の体を調べたかったのだ」

こんなふうに博士の語り口はいつも偏狭へんきやじみているが、妙に筋が通っている。しかも聞き上手だからタケルが「なるほど」というまで説明の労をいとわず、言葉をかえて話してくれる。

そんな博士が、なぜ町の人たちから疎うとまれるのか？最大の疑問を当の本人に投げかけてみた。すると「わしに、町の連中とどんな話をしろというんだ？」と大爆笑されてしまった。言われてみれば、博士との話題は、小生であるタケルにも理解できるレベルではあるものの、

生物、物理、化学など、およそ世間話には似つかわしくないものばかりだ。タケルにすれば、今やテレビゲームよりも魅力的な世界なのだが。

遠く関西に引っ越してきた今でも、タケルが科学に興味を持ち続けているのは、博士の影響だ。

6

タケルが読書好きになったのも、博士の膨大な蔵書のおかげだ。初めは博士に紹介されるままに閲覧していたが、博士が学会などで不在のときには、動物たちの世話をする約束で研究所の鍵を預かり、好きな本を日がな一日読みふけた。

博士と出会ってからの数ヶ月は、タケルの中で宝石のように光り輝く思い出だった。

関西に引っ越してからも、タケルは週に一度は博士と電話で話した。掛けるたび、つい長電話になってしまうが、IP電話を使っているのでお金の心配はいらない。

「博士、今日はぼく、すごい夢を見たんです」とタケルは早速本題に入った。

「ほう。聞かせてもらおうか」

タケルは就寝時間の早い家族に気遣って、声が大きく

ならないよう注意しながら、受話器を持ちかえて、ベツドに腰掛けた。

「ぼくね、大きな地震に遭^あつたんです」という出だしで話し始め、老木の根が作る空洞に避難したこと、激しい揺れと共に目の前の地面がパッキリ割れたこと、逃げまどう人々がそこに吸い込まれるように落ちたことまで、一気呵^{いっき}成^{かせい}に話した。

地割れの件では耳に残る悲鳴がよみがえってきて、思わず身震いしてしまった。

「その様子を見たとき、心の中で『ざまあみろ』って叫んでしまったんです」

「そうか」

タケルは博士と話するとき、一切隠し事をしない。^{ちゆうちよ}躊躇する気持ちがないではなかったが、博士に話したことを後悔するようなことは、今まで一度もなかった。

タケルは話を続けた。

地割れに落ちそうな人を助けてしまったこと、それが小猿であつたこと。

「猿う？」と、博士は意表を突かれたのだろう、声が裏返っていた。

「そうなんです、博士が飼ってたチンパンジーぐらいの大きさで」

「いやあーこれは面白い」とワクワクしている。

「でしよう？　それで地震がおさまるのを一緒に待っていたら、今度は母親が登場したんです。それがね、猿じゃなくて猿人えんじんだったんです」

霊長類研究家の博士は呻うめき声を上げた。自分もその夢を見たい！と思ったのだろう。でもこの時点でタケルはわざと話す順序を変えていたのだ。

そして、その時がきた。

「でね、じつはぼく自身も猿人だったんですよ」

7

「ぐぬ――」

新出博士はうなった。タケルには博士の心の内が手に取るようにわかる。博士はよく口にしていたから。もしタイムマシンで好きな時代に行けるなら、猿が人間へと移り変わる頃に行ってみたいと。行ったら猿人の仲間に加わって、いっしょに生活してみたい、とも。

人類の進化には、まだまだ謎の部分が多い。現代の我々は、骨の化石によって昔の姿を類推するしかないのだが、現在判明している進化の流れには途切れている部分があつて、ミッシング・リンクと呼ばれている。DN A鑑定が導入されて、研究レベルは飛躍的に向上した今日でも、骨自体が発見されないと、真実を知ることとはで

きないのである——。以上はもちろん博士の受け売り。

「タケルは仲間になって生活しとったのか？」

やっぱりそこが一番聞きたいらしい。

「ううん、仲間たちには出会わなかった。家に到着する前に目が覚めたし」

「だが、猿人の着ぐるみ姿だったということは、仲間になりすましとったんだろなあ」

「あ、違う、そうじゃないんです」とぼくはあわてて訂正した。「着ぐるみじゃなかったんです」

「なに？　どういうことだ？」

「腕に、ざあーっと毛が生えてたんです。引っ張ってみたらちゃんと皮膚に生えてるのがわかったんですよ」

「な……なんと——」

博士は再びうなり声をあげた。これは夢の話だってこと、すでに忘れてるらしい。

「その毛がぼくの肩にも足にも、お腹にもビッシリ生えてたし」とだんだん得意げになってきた。

「薄茶色というかベージュ色の毛が一面に」

「そうかあ……化石じゃ毛の色まで残つたらんからなあ。

——その夢の中のタケルは四足歩行で歩いとったのか？」

「えっと——そう、四つ足で歩いてました」

博士はいま、本物の猿人にインタビューしてる気に

なつてると思う、絶対。

「なるほどなあ。で、小猿の親子はどうだった？タケルと同じような姿をしとったか？」

タケルは少し薄れてきた夢を必死で回想した。

「うん、四つ足で歩いてたし：あれれ？」

「どうした？」

「親子の毛はね、すつごく濃い色だった。焦げ茶色っていうのかな、そんな感じでした」

「ふうーむ」

電話越しに博士の椅子のきしむ音が聞こえた。

8

タケルは受話器を握る手の平が痛くなってきたので左手に持ちかえた。右の耳たぶもずっと押しつけられていたので跡が付いていた。

電話の向こうで、博士が軽く咳払いした。

「――タケル。最近、髪を染めたか？」

「へ？」と思わず気の抜けた声が出てしまった。

「なんのこと？　してませんよお」

「そうか。いやまさかとは思ったんだがな。タケルが茶髪にしたせいで、夢の中までな：」

ぷっ。タケルは吹き出してしまった。緊張で肩に入っ

ていた力がスーッと取れた。電話からも、くくくという笑い声が聞こえてきた。しまいには二人とも爆笑してしまった。静かなトーンで。

「なあ、タケル」

「なんですか、博士」

「タケルはいい夢を見たな。本当に羨ましいよ」うらや

「へへへ、たまたまそんな本を読んだから」

「それで見られるんなら、わしなぞ毎晩、猿人たちと宴会しとるはずなんだがな」

「猿酒飲^{さるざけ}み過ぎて、研究どころじゃないかも」

「言うなあ、タケルう」と博士は快笑した。

「タケルを起こしてくれた先生は、いい先生のようにじゃないの？ 美人か？」

「井沢美代子先生？ いさわみよこ んーわりとキレイかな」

「ほーほー」

「先生にもね、いろんな本を紹介してもらってるんです。この前も、科学に興味があるならこんな本はどうかなくて、シャーロック・ホームズを紹介してくれて。で読み始めたら面白くて、あつという間に全集ひととおり読んでしまったんですよ。自分でも信じられない。これまで物語って興味なかったのに……。その次にはSFもいいかもってことで、アーサー・C・クラークの『幼年期の終わり』という本をいま読んでるところです」

いつの間にやらタケルの舌はターボ全開の自動車さながらに回りまくっていた。少し汗ばんで、熱っぽい。井沢先生の名前が出たあたりからだ。

「その本は未来の科学についてすごくきっちり書かれているんです。宇宙人がUFOでやってきて、地球人の予想もしなかった進化を促すんだって」

「それならわしも読んだよ。名作だ。クラークのイマジネーションは人類でもトップクラスだな」

「先生言うには、三島由紀夫って人も絶賛してたんだって」

「三島？ あかん、わしゃ文学には弱い！」

そういつて博士は苦笑した。

夏の夜は、虫の鳴き声とともに更けていった。タケルは、また博士に会いたいなと思った。

9

電話の奥で何かが割れるような音がした。

「なに？」とタケルは尋ねた。

「ん——なに、またウチの動物たちが暴れとるんだらう。最近はずいぶんやんちゃになってなあ」と博士。「どれ、見て来るかな」

「長い時間、聞いてくれてありがとう」

「いやいや、わしにとつてもタケルと話するのは楽しい。こちらこそありがとう。もう話し残したことはないか？」

タケルは考えた。何か言い忘れてることがあるような気がする。でも思い出せない。

「また電話します」

「そうしておくれ。じゃあ、おやすみ」

「おやすみなさい」と電話を切った。

今夜はぐっすり眠れそうだ。

それから二日ほどは陽ざしの強い、快晴の日が続いたものの、三日目にしてあいにくの雨模様となった。タケルは学校で借りた本を昨晚中にすべて読み終えていたので、今日はどうしても登校して次の本を借りたかった。それに今日は井沢先生が当番の日だ。TVのニュースによると、大きな台風がゆっくり近づいてるらしい。待っている間も雨は止まないだろうという祖父ちゃんの見聞き、タケルは家を飛び出した。図書はビニール袋にしっかりと包んでリュックに入れ、頭からレインコートをすっぽりとかぶつての完全武装だ。

道路はもうあちこちに水たまりができて始めていた。タケルは自転車をいつもの半分のスピードに保ちながら坂道を下っていった。

学校には9時半前に到着した。こんな時間に図書室目当てで来る生徒なんか他にいないだろう。雨足は心なしか少し強くなった気がする。タケルは駐輪場に自転車を止め、図書室の軒下まで走った。いま図書室はプレハブ製の仮家屋で、校舎とは独立している。本当の図書室は、蔵書数が増えたので拡張工事中なのだ。

図書室の入口は鍵が掛かったままだった。おかしいな、今日は9時から開いてるはずなのに。鍵は当番の先生が開けてくれることになっている。ガラス窓から覗くと電灯もついてない。

タケルは職員室に行ってみた。他の先生はいたが井沢先生の姿はない。尋ねるとまだ登校されてないという。どうしたんだろう。タケルは職員用の駐車場に足向けた。雨の日は愛用の車で来るはずだ。校舎の出入口から目を透かしてみた。

あつた！ 先生の赤の車だ……！！

雨空の下、くすんだ霧雨に包まれて井沢先生の赤い車は駐車場でひととき目立ってる。ボディに合わせたシートの赤も、眼の良いタケルにはフロントガラス越しによ

く見える。

車内に動く影があつた。ドキツとした。先生がいるんだ。どうして降りて来ないんだらう。

泣いてる？

タケルはその場に立ちすくんでしまった。顔にハンカチをあてて、うつむき加減の姿はまぎれもなく涙を拭う仕草はまぎれもない。半年前の母さんと同じだ。あのころの母さんは毎日泣いてばかりいたんだ。寄り添うタケルの姿も目に入らないかのように。

また見たくないものが見えてしまった。

タケルは自分の視力を呪った。こんなことの繰り返しだ。もうたくさんだ。

車のドアが開いた。先生が降りてきた。施錠すると傘も開かずにこちらに歩いてくる。出入口のそばまで来たとき、やっとタケルに気づいた。

「あ…おはよう」

「——おはようございます。先生、図書室——」

「そうね、ごめんなさい、遅くなつて」

先生はぎこちない笑顔でタケルに応え、職員室へ急ぎ足で入っていった。やがて鍵を持って図書室に向かい、開鍵してくれた。その間、^{かん}タケルは付いていきながら、うつむいたままだった。

むっとする空気の充満する図書室に入った先生は、貸

し出しカウンターの向こうへ回り、空調のスイッチを入れ、控え室の方へと姿を消した。タケルは居心地の悪さを感じた。いつもの図書室ではなかった。返却図書をカウンターに置くや書架へと走り、数冊の本を抜き出して、貸し出しカードに名前と日付を書いてカウンターに置いた。

「先生！今日は天気が悪いので帰ります」

先生が何か言いながら控え室から出てきたが、タケルは先生の顔も見ずに深々とおじぎをして、図書室を飛び出した。

雨の中の坂道、自転車を押しながらタケルは悔しさでいっぱいだった。なぜ逃げないといけないんだ。母さんのときだってそうだ。タケルには何もできなかった。タケルもいっしょになって泣きたかったけど、おろおろする祖母ちゃんを見てると泣けなかった。「母さんを支えてやれ」という祖父ちゃんという言葉がタケルの感情をむりやり奥の方へ封じ込んだ。それでも耐えられず、母さんのそばから逃げた――。

その夜、タケルはたまらず新出博士にメールを打った。

タケルの携帯メールはいつも短い。メールを打つ相手つまりメル友は博士しかおらず、たいていはこんな通話うかが伺いだけだからだ。関西へ移住して一学期が過ぎたのに、結局学校ではメールし合うほどの友達は何も得られなかった。クラスメートとは普通に会話している。でも彼らの目には「よそよそしいヤツ」と映っているのに違いない。

2時間が過ぎた。メールの返事はまだ来ない。せっかちな博士にしては珍しいことだった。タケルは今日借りてきた『地球の歴史』という本を机の上に開いて待つことにした。地球が生まれてから現在までのようすを一冊にまとめた本だ。

雨は一向にやまない。台風が接近しているのだから当然か。タケルはまんじりともせずページを繰っていた。

ダメだ、今日はさすがに本を読む気分になれそうもなかった。

いつしか陽が暮れていた。もう一度メールしようかと考えたが、思い直して直接コールすることにした。

博士の電話番号を選び、通話ボタンを押す。ルルルル、ルルルル、プシッ。つながった。

「こんばんは、博士。お忙しいですか？」

タケルの声は勢い余って早口になった。

「プッ」

なんだ？ ノイズ？ と、笑い声が聞こえた。ノイズ

じやなくて吹き出した声だったようだ。

「オマエ、誰よ？」向こうの声が言った。

博士じゃない！ 誰だ？ かけ間違えたのだろうか。いやそんなはずはない。タケルの携帯には他に登録してある番号なんかないのだ。

「ふーん、タケルっていうのか」

どうやら画面にタケルの名前が表示されているらしい。ということは博士の携帯に間違いない。

「あの：博士はいないんでしょうか？」

タケルはおそろおそろ相手に問いかけた。

「知らねえよ。バーカ」

そう言って、いきなり通話は切れた。切れる直前に別の笑い声と、何かが床に落ちて壊れるような物音がした。肝の冷えるような大きな音が。

タケルの頭は混乱した。どうしたんだろう博士は。落とした携帯を誰かに拾われたんだろうか。それとも：わからない。

いつの間にか、タケルは机に突っ伏して泣いていた。今日はわからないことだらけだ。先生も、博士も。いたいぼくはどうすればいいんだ！

泣き続けたタケルは、やがて泣き疲れて、そのまま眠りに落ちていた。